作歌に、角障石村之道乎云々、九月能四具禮能時者、黄葉乎折插頭跡云々と（萬葉集卷第三雜歌）みえたり、猶同集に、ながつきとよめる歌數多あり、擧にいとまあらず、扨ながつきの解をなせるは、みつね忠岑にとひ侍ける歌に、よるひるの數はみそぢにあまらぬをなど長月といひ初けん、とよめる答に、秋ふかみ戀する人のあかしかね夜をながつきといふにやあるらむ、（拾遺和歌集卷第九雜下）とみえたるを初にて、九月夜漸くながき故に、夜長月といふを誤れりと（奥義抄）いひ、長月夜の長き時分也と（下學集）いひ、九月、ながつき、古說に夜の長きをいふとあり、さもあるべきと（類聚名物考）いひ、ながつき九月をいふ、長月の義、夜長月ともいへりと（和訓栞）解るも、皆拾遺和歌集の歌の意とおなじく、此月分て夜の長ければ稱せるなり、然るを加茂眞淵は、九月をながつきと云は、伊奈我利月の上下を略きいへり、稲は九月に苅をさむる也と（語意）いへるを、本居宣長は是によりて、師の考に九月は稲苅月なりといひ、又九月は稲熟月にてもあらんか、但シ賀を濁るは、刈にても熟にてもいかゞなるは、音便にて濁るか、ばた異意か決めがたしと（古事記傳詞志比宮卷）いへり、凡秋三月みながら稲の事もて、月の名を成事、既に七月八月の考にいひ置り、又此月の異名を、いろどり月と（秘藏抄）いへるを始として、菊開月、紅葉月と（莫傳抄）いひ、小田刈月、寢覺月と（藏玉集）いへり、

〔日本書紀三神武〕戊午年九月

〔日本書紀通證八神武〕九月夜長月也

〔萬葉集八秋相聞〕遠江守櫻井王奉天皇歌一首

九月之、其始雁乃、使爾毛、念心者、可聞來奴鴨、

〔古今和歌集五秋〕ながつきのつごもりの日、大井にてよめる、

つらゆき○略歌

〔拾遺和歌集九雜〕みつね、たゞみねにとひ侍ける、

參議伊衡

よるひるのかずはみそじにあまらぬをなど長月といひはじめけむ